

1. ちくさこども食堂

記録：井上実

場 所：キッチン ARAGUSA（名古屋市千種区春岡 1-4-13）

対 象：こどもも大人も誰でも OK

参加費：こども 無料、大人 300 円

代 表：加藤 三重子さん

初 回：2015 年 12 月 27 日（日）17：00～ 毎月 1 回

おなかいっぱいみんなで食べる

街の地域の食堂だよ

こどもも大人も誰でもいいよ

こども一人だって大丈夫

参加日時①：2016 年 11 月 27 日（日）17：00～19：00（ボランティア 15：00～）

参加人数：こども 20 人、大人 15 人、ボランティア 12 人

献 立：カレーライス、コロコロサラダ（60 食用意）

参 加 者：井上実

◎流れ

15：00～ 調理

16：30～ ミーティング

17：00～ 来店

19：00 終了、ミニ交流会

参加日時②：2016 年 12 月 18 日（日）17：00～19：00（ボランティア 12：00～）

参加人数：こども 33 人、大人 47 人、合計 80 人 ボランティア 25 人程度（子ども食堂
が開始してから参加された方や、途中で抜けていった方を含む）

献 立：ロールチキン・洋風混ぜご飯・ゼリーパンナコッタ（70 食用意）

参 加 者：井上実、小瀧一誠

◎流れ

12：00～ 準備開始（内装がクリスマス仕様に。暖かい雰囲気だった。）

15：00～ 準備がだいたい終了、記念撮影、ちくさホームニュースの取材

16：30～ 最終確認

17：00～ 来店（帰る際にはクリスマスプレゼントがもらえる。）

19：00 終了、ミニ交流会

◎きっかけ

これまでに自店でフェアトレードや異業種コラボ、ディナーライブ、保健環境委員として毎週の資源分別などを行い地域参加してきた。飲食店の利を生かし、地域にもっと踏み込んだ取り組みができないものか？と思ったとき、自然に思いついたのが「こども食堂」だった。場所を提供し、みんなに料理を作ってもらい、子どもたちに食べてもらおう。これだけでもいいのでは、と軽く思い立ち上げた。

◎運営

キッチン ARAGUSA は場所を提供するが、運営はボランティアの人みんなでやるというスタンスである。指令し、されるのではなく「私が主催者！」だと思ふことで、それぞれが今何を必要とされているのかを判断し協力し合える、お互いを認めあうことのできる食堂にしたいと思っている。

◎対象

最初は貧困の子どもを対象にしていたが、「貧困」という言葉を使いたくはなかった。こども食堂をやっていくうちに、「貧困」と言ってもお金だけではなく、夫婦や親と子の関係などにも当てはめることができ、色んな貧困があるのだという意識が変わった。全てにおいて子どもを守ることができたらと思い、貧困の子に対象者を絞ることはやめた。子どもも大人も誰もが食べることを通して仲良くなれたらいいなと思っている。

◎お店

席数 22 (テーブル 12, カウンター10)

「ちくさこども食堂」という名前は対象を学区より広げ、「こども食堂」があちこちにできればいいなという思いで名付けた。「こども食堂」＝こどもを丸ごと支援し、見守るとりくみという意識で活動をしており、活動を続けていく中でじわじわと広がっている、どんどん成長していると感じる。

◎食材、献立

毎回、おてらおやつクラブからお菓子の寄付があり、子どもたちにお土産として渡している。

(おてらおやつクラブとは第2回からつながりがある。3月の「出張ちくさこども食堂」ではコラボをした。)他に、一般の方からお米やそうめん、冷や麦が郵送や当日の寄付でもらえたり、お客様から野菜、スタッフからお菓子の差し入れなどがある。足りない食材は加藤さんが購入している。カンパや食材などを持ってきてくれる人がたくさんおり、「世の中捨てたもんじゃない」と思う。

「手をかけてできるだけちゃんとしたものを食べてもらいたい」という思いで調理をしている。

アレルギー確認のために使った食材を用紙に記入して店内に掲載している。

◎参加者

多いときは60人ほど、少ないときはスタッフを入れて40人ほど。親子で来る人は固定さ

れてきている。続けていくうちに子どもの参加が増えてきている。ソーシャルワーカーからの紹介で来ている子たちがいる。

一人で来る大人の中には誰かと話したいという人が多く、何を食べるかじゃなくて誰と食べるのかが「おいしい！」につながるのではないかと考えている。

◎ボランティアスタッフ

毎回 10 人くらい（その中に男性が 4 名いる）の人が固定で活動を行っているが、実際に関わっている人は 25 人くらい。その人たちが入れ替わりをしながら運営している。ボランティアは、大人のほかに小・中学生、幼稚園児などがあり、年齢は様々である。中にはイタリアンシェフの方がおり、その人を中心に調理を行っている。ポスターを見て加藤さんに電話をして参加する人が多く、継続して参加する人たちは、毎月の活動を楽しみにしている。ひとりひとりに「やりたい」「やろう」という心構えがあるから続いており、スタッフのみんなが回を重ねるごとに成長していると感じる。大人にとっては、「自分探し」や「自分確認」の場になっているのではないかと。

◎資金

赤字覚悟でやり始めたが黒字。カンパと参加費で賄っており、当日カンパをしに来る人や、お客様の中に多めに支払いをしていく人がいた。毎回の出費は 15,000～20,000 円くらい。今のところ繰り越しが 20 万円以上ある。

◎宣伝

県婦人部岡崎でのお出かけ常幹を皮切りに、はたらく女性の愛知集会・こども社会保障の集まりでお知らせした。

ポスターはボランティアスタッフが様々な場所に協力を頼んでおり、生協、児童館、生涯学習センター、掲載 OK の自宅、マンションの掲示板、飲食店など様々な場所に掲示してある。（飲食店→自分のお店で子ども食堂はできないが、ポスターを掲示することで趣旨に賛同。）また、千種区だけではなく、東区や名東区にも掲示している。掲示箇所が徐々に増えており、ポスターを見て参加する人が多い。他に、千種ホームニュース（月 2 回、情報誌）に初回から毎月献立を掲載したり、毎回、子ども食堂を開催した翌日に報告書を店の前に張り出したりしている。

開催当初、スタッフの方が近所の子どもを誘ったが、子ども食堂が貧困対策としてメディアで取り上げられているので、いくつかのご家庭には「なぜうちの子が誘われるのか」と断られた。

◎やっていて感じること

自営業者がやるので、場所や機材があるからやり始めるハードルは低いのだが、生活や営業があるので家族の協力がないとできない。なので、同業者の中ではなかなか広がらない。キッチン ARAGUSA では、店主である息子さんが毎回、子ども食堂が始まる前に掃除をしてくれたり、旦那さんが裏でお米を炊いてくれたりしており、家族のありがたみを感じる。子どもをキーワードにするとハードルが低くなり、色んな人が来てくれる。地域にとっては、

コミュニティづくりや寄り合いの場になっているのではないかと感じる。継続していくことが大切と感じている。

◎子ども食堂以外の活動

熊本義援金 1,162 円とちくさこども食堂からの出費と合わせて 10,000 円を小学校炊き出し支援に送った。

◎課題

スタッフの人数が増えるとチームワークを保つのが大変だが、その都度子ども食堂の意味を確かめることで問題を解決していきたい。様々な角度から確かめ、みんなで考えて子ども食堂のハードルを低くしていきたい。

ソーシャルワーカーや社会保障推進協議会とのつながりを持つなど、ネットワークを広げたい。

◎①感想（井上）

子どもだけ、大人だけの参加が多かった。大人だけの参加者がお店を出る直前までボランティアの人と談笑している姿がとても印象に残った。ご年配の方は「いつも一人で食事をするから、今日は大勢の人と食事ができて楽しかった。」とおっしゃっており、こども食堂という名ではあるが、大人の居場所にもなっていると感じた。日々の生活に寂しさを感じているのは全世代の人に共通すると思うので、子どもに限らず大人にもフラッと立ち寄れる落ち着いた場所が必要なのだろうと思った。運営に関して役割分担が素早くできたり、空き時間に話し合いができたり、一人一人が積極的に動いており“みんなで作っている”という意識が強いように感じた。それ故に、店の雰囲気が良く、チームワークも抜群でみんなが居やすい場所になっているのだろうと思う。

◎②感想（小瀧）

ボランティアの人がこんなに入れ替わりで参加している子ども食堂は初めてだった。親子で来店し、子どもが食事をしている間、親がボランティアとして子ども食堂に参加している家族がいくつかあった。また、千種ホームニュースの人が取材に来ており、千種子ども食堂ができて以来子ども食堂で出されている献立を掲載しているらしく、情報提供の場が常にあるのはすごいことだと思った。場所提供しているキッチン ARAGUSA の人たちが中心となって子ども食堂を開催しているので、ほかの子ども食堂の悩みである場所問題は心配なく開催できていることが分かった。また、親子での参加が多く、普段一緒に食事をする時間を確保出来ない家族が、そのために子ども食堂を利用しているのではないかと考えた。

◎写真

